

酉の市

毎年開催される酉の市のルーツは、江戸時代（1603 年 - 1867 年）に遡ります。11 月の 2 日または 3 日間開催される祭と市が組み合わさった酉の市は、奥浅草を大行商人と観光客が来る年の幸運を願って大騒ぎする中心地へとその姿を変えます。

この伝統は、浅草の長國寺と鷺神社から始まり、そこから全国的に広まったと言われています。酉の市は、十二支と旧暦で定められる 11 月の酉の日で開催されます。通常の年には、縁起が良いとされる酉の日が 2 日ありますが、11 月に酉の日が 3 日ある年があり、その場合でも酉の市は開催されますが、3 番目の酉の日は火事の前兆となる縁起の悪い日だと考えられています。酉の市は、当初は収穫祭という形で、この祭の間、鶏が浅草寺の前に放たれていました。酉の市は長年をかけて徐々に翌年の幸運と繁栄の願いを表現するイベントに変わりました。酉の市の間は、観光客は浅草っ子、つまり浅草で生まれ育ち、浅草地域の伝統に揺るぎない誇りを持つ地元の人々による真のもてなしを体験することができます。

酉の市の目玉のひとつに、竹製で装飾をほどこした熊手があり、これを買った人は、来る年の幸運を「かき集め」たり厄を除けたりできると考えられています。酉の市の熊手は当初、稲の束だけで装飾されていた非常に地味なものでしたが、この祭の進化にしたがって装飾がどんどん手の込んだものになっていきました。最近のものは金や銀で装飾されており、扇子や神輿などの日本の伝統的な絵柄、日本の神様やさらには可愛い動物で装飾されているものもあります。熊手には様々なサイズのものがあり、手のひらに収まるほどの小さなものもあれば、肩に担いで運ばなければならないほどの大きなものもあります。酉の市に 3 日目がある年には、特別な火事除けのお守りも販売されます。

熊手は見るだけでも楽しいですが、本当の楽しみは熊手を買うときに始まります。日本の一般的な風習とは異なり、買い物客と店主は、双方で合意できる値段が決まるまで値切り交渉をするものとされています。店主には釣り銭をチップとして渡すものとされています。買い物客は購入後、感謝を表すために、リズミカルな拍手で送り出されたり、時にはお酒が 1 杯振る舞われたりすることもあります。観光客は、その次の年にも引き続き繁盛し続けることを願って翌年用に新しいものを購入する前に熊手を購入した寺または神社に戻って感謝することを勧められています。